

争遂行のために、国はあらゆる金属の供出を決めました。それで鉄鍋や釜だけでなく、学校に立っていた二宮金次郎の銅像もお国のために出征するんだということになった。

いよいよ二宮金次郎の銅像が撤去されるという時に、私たち悪ガキは考えた。この野郎のおかげで俺たちは先生にどれだけ説教されたかわからない。「二宮金次郎を見習いなさい。働きなげばかりしていないで、働きながら勉強しろ」

よし、いい機会だから金次郎の野郎が何の本を読んでいるのか確かめてやろうじゃないかって、銅像の台座によじ登ってみたんですよ。そうしたらうちの小学校の銅像の本には「忠孝」と書かれていました。なんだよ、たった二文字かよ(笑)。

一つじゃ面白くないから、他の小学校の金次郎も確かめてやろうということになりましたね、近所のよその小学校にまで遠征した。面白かったのは、学校によつてずいぶんと中身が違うんです。お金をかけて作られた銅像には、

七中に入學したのは、
昭和十八年の四月です。
今でも口頭試問の
問題は覚えていますよ。

たくさん字が書いてある。当時は読めませんでした。たぶん「論語」だったのではないのでしょうか。ところが、なかには白紙の本を読んでいる二宮金次郎もいました。「この野郎、何も書いてないくせに読んだふりしやがって」なんて言いながら、金ちゃんの頭をコツンと殴ったりしていました。五つ目の小学校で捕まっちゃいました。

ガキは校長室に呼び出されて、ガミガミと説教される羽目に陥りました。まあそんなろくでもないことばかりしている悪ガキでしたから、もちろん勉強なんかするはずありません。それでも、なぜか中学校に行こうという気になったんですね。

府立七中へ送られた日々

当時、向島あたりの小学校から中学校や女学校に上がるのは、五十人のク

ラスで十人もいません。たしか、私のクラスからは七、八人でした。その頃はみんなまだ貧しかったから、小学校を出ると中学校どころか、高等科にも行かず、奉公に上がる子どもたちも多かったんですね。

昭和十六年に国民学校令が施行され、初等科六年、高等科二年、合わせて八年間の国民学校は義務教育と決まったんですが、実際には義務教育化は延期されたりして、完全には実施されなかつたんですね。

で、中学の試験の話ですが、昭和十六年から中学校の試験は、内申書と口頭試問と体育検査だけになっていました。

体育は懸垂だろうが、尻上がりだろうがお手のものでしたから、まあ心配ない。問題は内申書と口頭試問です(笑)。それで、おやじが私にこう言うんです。

「おまえ、どうせ内申書は最低だろうなあ。よし、担任を一度呼んでこい。一杯飲ませようじゃないか」

うちのおやじは当時、区会議員をやっていたので、一応、町では名士だったんですね。それで担任の先生も無下には断れなかつたのか、我が家に来て来て、おやじにたつぷりと酒を飲まされていました(笑)。

結局、担任からは、両国の府立三中、今の両国高校は無理だろうから、府立七中を受けなさいと勧められました。現在の墨田川高校です。



大畑小学校の卒業写真。半藤さんは最上段の右端、後方右手に二宮金次郎像が見える

加した学校は、かなり危ない所に送り込まれた事例も多かったようです。

なかには送り込まれた工場が爆撃をうけ、生徒が五、六人亡くなった中学もあったそうです。その学校の校長がまた非常に剛毅な方で、生徒を全員引き揚げさせたくえ、もつと安全な場所に変更するように政府に談判したといった話を聞きました。

今ならあたりまえの行動と思われるかもしれませんが、当時の状況で上に逆らうのは勇気がいります。この校長だって、後々、相当締めつけられたと思いますよ。

ところで、われわれ中学生が軍需工場で実際にどんな仕事をさせられたかですが、この「ニッペイ産業」は零式戦闘機に積む二十ミリ機関銃の弾を作る工場だったんですね。

二十ミリというと二センチですから、それほど大きなものではないと思われるかもしれませんが、弾というのは、信管と弾丸と薬莖の部分から成っていて、全部あわせると一発が二十五、六センチにもなりますので、相当大きな代物なんです。

そのとき僕らはまだ十四歳ですから、旋盤を使う作業なんかはやらせてもらえません。やっていたのは、流れ作業で弾の品質検査を行う仕事です。私の担当は、薬莖の部分の検査だったように記憶していますが、そんな話よりも実はもっと大切な話があるんです。

僕らが工場に初めて行った日、すで

うちのおやじは、ちよつと変な人間でしたねえ。 戦争中、表で言えないようなことを平氣の平左で言っていました。

に動員されていた女学校の四年生が待っていて、作業の手ほどきをしてくださいました。丸一日一緒に手取り足取り。私は手ほどきしてくれた人と、その日のうちにすっかり仲良くなりました(笑)。

「あ、玉杯に花うけて」を愛読

私より二歳年上のその女性は、忍岡高女四年の上野さん……だと、ずっと思い込んでいたんですが、人間の記憶なんてものは実に当てにならないものですなあ。最近になって、この話を働

労働員と一緒にいった連中になりましたら、おまえさんの言っていることは違うとバカにされてしまった。「あのとき俺たちに教えてくれたのは、小松川の第七高女のお姉さん方だ。だいたい忍岡高女は来ていなかっただろう。上野忍岡高女の四年生は来ていたから、それで忍岡の上野さんなんて言っているんじゃないかねえのか」

男女の仲といつても、なにぶん戦争中の話ですから、甘ったるいものじゃなくてこの程度のものであります。

それでもこの人とは仲良くなりまして、今でいうデートのようなことを軍

需工場の中でするわけです。工場の休み時間に話したり、手紙を交換したり。しかし、それがあつた日、同じ工場にいた大学生に見つかってしまった。猛烈な往復ビンタを張られてしまった。「この野郎、この非常時になにをしてくるか!」

そう怒鳴りつけてきたのは、物理学校、今の東京理科大学の大学生でした。彼らもまた勤労働員で工場にやつて来ていたのですが、われわれと違って殺氣立っていましたね。なにしろ二十歳になれば、もう兵隊に行く可能性があるわけですから。

その後すっかり私は札付きになってしまい、何度もボコボコに殴られました。私も私で、休み時間に新聞を読みながら、ついつい余計なことを言ったりしてしまふんです。

たとえば、「中国に爆弾投下、全弾命中」などという記事を目にすると、言わなければならないのに「そんなもの当たるに決まっているだろ。中国大陸は広いんだから」なんてことを口走ってしまうわけです。

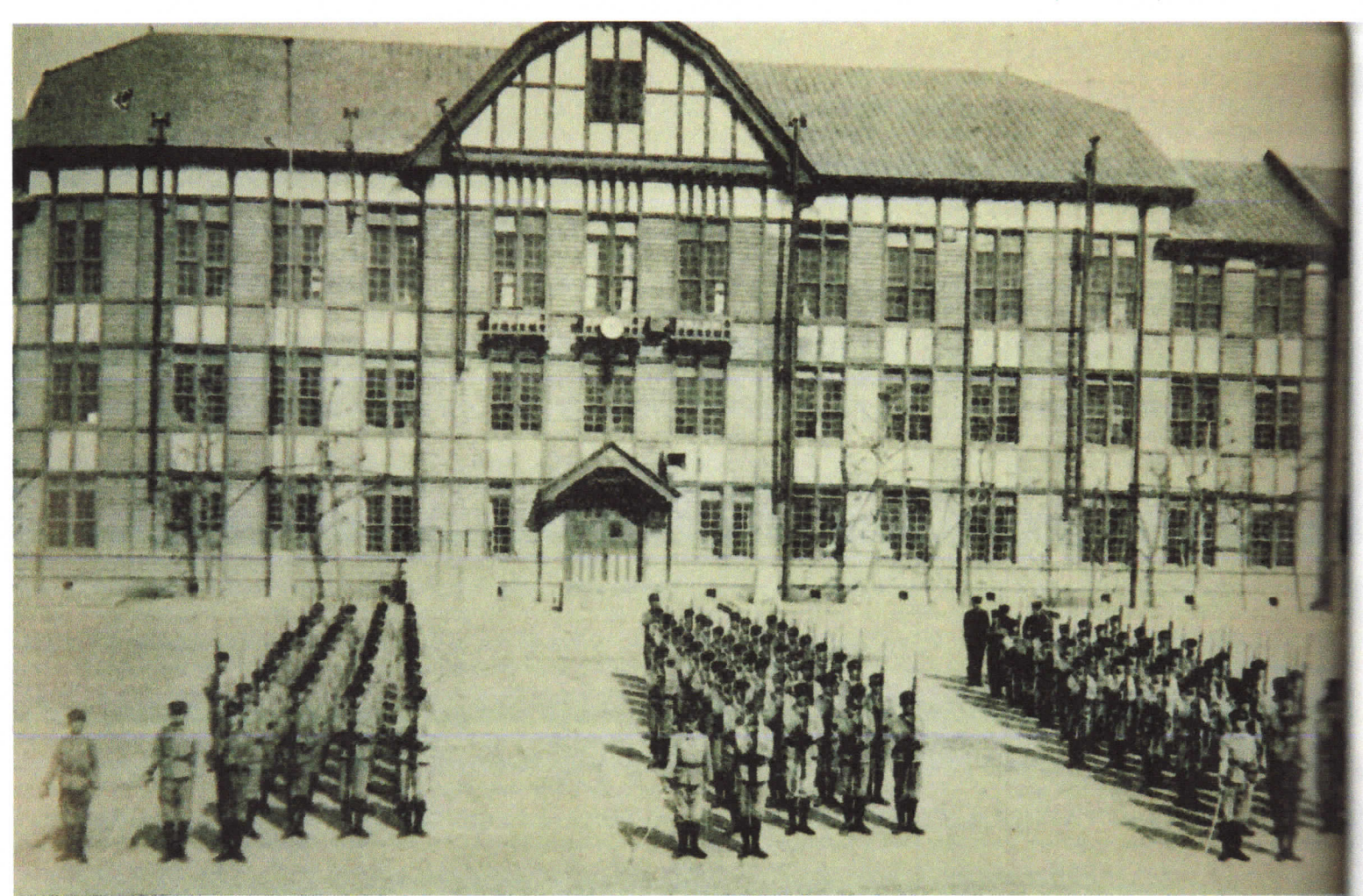
いずれにしても、私は熱狂的な軍国少年ではありませんでした。あ

の当時、陸軍幼年学校や海軍兵学校に憧れる者が多くて、みんな受験しに行ったりしていましたけれど、私は端から軍隊の学校に行こうなんて気はありませんでした。佐藤紅緑の少年小説「あ、玉杯に花うけて」を愛読して、俺はもう断固として一高へ行くと、そう決めてたんです。頭もよくないのにねえ(笑)。

軍国少年にならなかったのは、おやじの影響が少なからずあつたと思えます。うちのおやじは、ちよつと変な人間でした。けつして反戦主義者であつたわけではありませんが、それでも戦争中、その折々に当時としてはなかなか表で言えないようなことを平氣の平左で言っていました。

たとえば、昭和十六年の十二月八日、太平洋戦争が始まった時には「なにやつてんだ、この国は」とボヤいていましたし、山本五十六さんが戦死した際には「これでおしまいだ」なんて言っていましたよ。だから、「あの家のおやじは非国民的なことをしゃべっている」となんべんも指さされていたようです。毎晩博打をやつてゐるって、警官に踏み込まれたこともたびたびありましたよ。

おやじが区会議員だったという話をしましたが、なにしろ戦争中の市議員選挙に、非翼賛候補として立ちましたから、やはり戦争に対して思うところはあつたのでしょう。落選しましたけど。



旧制府立七中での軍事教練の様子を伝える貴重な写真（墨田区役所提供）

今でも口頭試問の問題は覚えていま
すよ。

一つは、「大日本帝国という名前を
決めたのはどこですか？ いつです
か？」というものでした。

これは皆さん、案外わからないでし
よう。ところが、俺は知っていたんだ
ねえ。「昭和十二年。決めたのは外務
省であります」と答えたね。それまで
日本の国名は、日本帝国とか日本国、
大日本とバラバラだったんです。外務
省がそれでは外国に対して格好がつか
ないと言い出して、昭和十二年から大
日本帝国と統一することに決まったん
ですよ。

七中に入学したのは、昭和十八年の
四月です。ご存じのようにその月の十
八日に我が越後の大先輩、連合艦隊司
令長官の山本五十六さんが戦死します
から、戦争はすでにかなり厳しい状態
になっていました。そういう厳しい状
況だったからなのか、もともと校長の
方針だったのかわかりませんが、七中
という学校は激的な軍国主義の学校で
した。軍事教練も厳しくて、徹底的に
しごかれましたよ。

だから、当時教えられたモールス信
号や手旗信号は今でもすべて覚えてい
ます。モールス信号は、「イトウ、ロ
ジョウホコウ、ハーモニカ、ニューヒ
ゾウカ、ホウコク……」って覚えてい
くんです。イは伊藤で、トツ（一・一）
は路上歩行で、トツトツ（一・一・一）
はハーモニカで、ツート

トト（一・一・一）、ニは入費増加で、
ツートツト（一・一・一）、ホが報国
でツートト（一・一・一）といった具合で
す。手旗信号はイロハニホトを両手
で大きく動かしてやる。徹底的にやら
れましたから、今でも散歩しながら手
旗信号やると、いい体操になるんです
（笑）。毎週水曜日にはマラソン大会が
開かれていましたし、柔剣道も盛んで
したね。

軍需工場で零戦の弾を

二年生となった昭和十九年の十一月
には、いよいよ勤労動員が始まりまし
て授業は完全に中止、軍需工場に行く
ようになります。海軍の軍需工場で、
大日本兵器産業という会社でした。地
元では「ニッペイ産業」で通っていま
した。

最近、当時の勤労動員について調べ
てみたんですが、どうも勤労動員令に
すぐ応じた学校となかなか応じなかつ
た学校があったようですね。校長の方
針によって、時期がずいぶんとずれて
います。ただし、すぐに応じた学校と
なかなか応じなかった学校のどちらが
結果的によかつたかは、判断がわかれ
るところなんです。

といいますのも、七中は校長の方針
なのか、勤労動員が始まったのが早か
った方だと思うのですが、海軍の工場
だけに設備が立派だったり、防空壕が
完備されていたりして、恵まれている
点多かつたんです。一方、後から参